

# 私の戦記

岩田正城

(会員・佐伯市堅田)

## 一、連隊長を憶う

昭和十六年九月、中支に於ける第二次長沙作戦は我が軍の苦戦で、長沙の一角には進出したが、敵の頑強な抵抗にあって戦局は膠着し、これ以上の前進は困難であった。

私はある任務のため連隊本部へ行く事になった。本部の所在地は不明であったが、通信隊のはった電話線を目じるしとして進んで行くと、広場があってその向側の民家に本部のあるのが分った。

その広場には熾烈に弾が飛んで来ているが、何の遮蔽物もなく、そこを突破するには余程機敏に動作しないと敵の狙撃的になる。と、本部の方からこちらへ一人の兵隊が駆けて来る。見ていると途中でばったり倒れた。

こんどは私が広場へ走り出た。倒れた兵隊をみる暇はない。突然本部から「来るな!!来るな!!」と、私を制する叫びが聞えた。後にはひけない。かまわずになおも走った。着いてみれば成る程弾ははげしい。敵の火器は小銃と機関銃であろう。敵の陣地は非常に近く、我が部隊はそこまで肉薄し、猛攻を加えている。敵も守備線を破られまいと熾烈な火線をしているのだ。

連隊長は指揮班の將兵を後に従えて、自分は前面に立って戦況を監視している。弾の中に身を置いていささかも動ずる色もなく、威風辺りを払うような風姿に、私は肝を冷やしながら連隊長の身辺に強い注意をひかれた。勿論はかの將兵も同じ情況であるが、できる限り弾は避けている。民家の低い庇の瓦に当る弾はものすごい。連隊長の足もとの地面に、土煙りをあげてつきさゝった。

耳もとをかすめて飛び去る弾もある。だが連隊長はすつくと立ったまゝ、推移する一線をにらんでいる。この情況と各隊の報告にもとずいて、次ぎに展開する作戦の機を窺っているであろう。

一個連隊五千に余る兵隊の命を掌中に握って、作戦の指揮を執る連隊長の胸中の閃きを、僅かにかいま見た思いであった。

部隊が、岳州地区の警備をしていた時の事である。岳州から前線への補給路は、三眼橋という三つの孤をえがいた石造の眼鏡橋が、洞庭湖の湖畔にかゝっていた。部隊にとって補給上重要な橋で、警備していた部隊がほかの戦線へ転出したので、一三連隊が警備することになり、その命令が私に下った。兵二〇名の編成で直ちに現地の警備についた。兵舎の裏の小山に分哨があつて、昼夜の別なく立哨して警戒に當った。敵情が平穩であれば、警備もまた楽であつた。洞庭湖は中国一の大きな湖で、その広さは想像を絶する。海を見て育った私には、広莫とした大陸が何となく空しく寂寥にたえられなかったが、ある日始めて洞庭湖を見た時、思わず海だと錯覚したが、久しく閉じていた眸が開いたような気がした。それ以来

洞庭湖を見れば心がなごむのであつた。

その洞庭湖は、夏の増水期には満々と水をたたえた湖面となり、冬の減水期には見渡す限りの草原となる地帯があつて、それを洞庭原と呼んだ。その草原のあちこちに水溜りが出来て、中に残っている魚をすくうのも面白かつた。夜は警備のしじま、たき火を囲んでそれぞれの故郷の話を出し合つたり、お互いの経験話に興じたりして、戦場とは思へない程楽しい時もあった。

ある時、連隊長の巡視があつた。服務中の者を除いて、全員整列して出迎えた。情況報告の後、連隊長の質問や注意もあつて、最後に「何か不自由しているものがあるか」と尋ねられたので、野菜がほしい旨申し上げた。一人の兵隊が、野菜が食べたいと言つていたのを思い出したからだつた。連隊長が岳州へ帰られると、時をおかず大量の野菜が到着した。

橋梁が爆破でもされたら、明治以来栄光に輝く連隊の汚点となる。任務は重いけれども、私達はとるに足りぬ一警備分隊である。連隊長が巡視に来られることは異例の事であろう。独立して警備にあたつていた我々は、その温情に勇気を鼓舞され、深い感銘をうけた。

また大きな作戦があるのであろう。連隊は作戦参加の準備に入った。私も無事なうちに任務を解かれて本隊へ帰った。先のことになるが、この連隊長も後に転戦した南冥の島ソロモンで、惜しくも草葉の露と消えた。

## 二、戦死を覚悟

前述のとおり、我が軍は長沙を制圧することなく撤退に決り、部隊は直ちに転進に移ったが、まだ長沙から離れできない友軍がいたので、いったん転進を休止してその部隊の転進を待った。敵は早くも追撃にうつり、我が軍の転進を阻害した。ある夜の戦いで、私共は本隊からはぐれた。朝になってみると、よその隊の兵隊も居る。本隊を追及する進路には、敵が熾烈に射撃して来る地点があつて、そこを突破するには、時を切つて各個に駆け抜けなくてはならない。前の兵隊が無事向側に走りついたので見定めて私が走り出た。半ばに達した時、もの凄いい衝撃を身に受けた。遂にやられた。弾は腹のようだ。駄目だなど、暗い気持が走った。その瞬間、思い出すいとまもなかったのに、母と妻子の三人の顔がちらちらつと、眼底をやき焦すようによぎつていった。暫くは眼中

に熱いものが残っていた。しかしその幻も一度去つた後には、二度と私の胸に思い浮ぶことはなかった。

なおも兵隊は次ぎ次ぎに駆けてゆく。「連隊本部の岩田兵長が、やられたと通伝頼む」と、駆けてゆく一人に頼んだ。ここでは駆けゆく兵隊の邪魔になると思い安全な場所へ移った。気分もいくらか落ち着いた。見れば腹部を貫通した弾は更に「葉こう」（兵隊が携行する弾入れ）まで貫通している。薬こうには既に弾はなかった。若し数発でも残っていたら、貫通した敵弾に暴発されて、私の腹は飛び散っていたらう。危いことであつた。

傷あとの疼痛はなかつた。出血も上衣までとおしたが、今は渗む程度である。弾は案外急所をそれているのかも知れない。しかし私は、死は必至と思ひ込んで、ひたすら死と対決してゆくのであつた。

刻々に死が迫って来ると思うと、時の流れが異様であつた。天も地も、あらゆる物が早い速度で流れてゆく。滔々とした大河の流れに流されているようでもある。流れてゆく先は暗黒世界だ。流れてはいけない。この流れからのがれたい。何かつかむものがほしかった。しかし、草をつかめば草もろともに、木に取りすがれば、その木

もろともに押し流されてゆく、この河の流れから、私を受けとめてくれるものは何もなかった。何ともいいようのない感情が湧き立って、その感情がとめどもなく私を苦しめる。耐えようもないその苦しみに私は悶絶した。その苦悶は何であったのだろうか。愛着や未練が焔ほむらとなつて、私の身をやいたのだろうか。あるいは、断末魔の苦しみであつたのかも知れない。

ながい苦悶の時が過ぎた。思い疲れて空の雲を見上げた。その雲を眺めていると、ふと「あゝこれで、おれも苦勞のしじまいだな」と、そんな思いが浮んだ。内地と言わず、戦地と云わず、人間生きておれば、必ず苦勞にとりつかれる。その苦勞からのがられることは嬉しい事だ。

もう幾年も前の事だが、内地を出る時門司港の埠頭で、輸送船のタラップに右足を踏みかけ、まだ岸壁に残っている最後の左足をひき上げる時、「再び内地の土が踏めるかな」と後髪をひかれる思いで乗船したが、それ以来国に帰る日を夢みぬ日は一日としてなかった。

しかし、もう帰りたくもない。また思いを残すような人もない。私の胸は青空のようにすがすがしく晴れわた

っている。身は羽毛のように軽く、地上をひらひらと舞っているようだ。

心は定まった。これが男の最期というものか、よしっ!! 男の最期なら男らしく死んでやれ。と、私は大陸の天地の間、ただ一人で声をあげて笑った。そして静かに時を待った。

いくらかの時が過ぎた。次第に意識はうすれて来ると思ったが、体の変調はあらわれなかった。すぐに死ぬことはないかと分ると、じっとしておれない。部隊へ帰りたくなつた。敵はすぐ近くだ。此処にぐぐぐしておれば、忽ち発見されて、負傷兵は止めを刺されるのがおちである。よしっ!! 部隊へ帰ろうと決心した。

泥水にふやけた軍靴は重い。脱ぎすてて靴下のみとなつた。かくて再び弾の来る台地へ出た。もう機敏な行動はとれない。弾もあたれば当るであろう。この弾の中を行かず、私にいつれの道が残されているだろう。あるいは這い、あるいははいぎって、ありつたけの気力ですこしづつ前へ進んだ。すると台地の向うに二人の兵隊が現われたと見るや、まっしぐらにこちらへ走って来る。やがて私の傍へ着くや否や、さっと左右に分れて、私の両わ

きへ肩を入れ、抱えずかすようにして、ひた走りに走った。漸く低地の安全な場所へ帰り着き、部隊に收容されたのである。何中隊か知らぬが、居合せた衛生兵が、すぐさま仮包帯をして「傷は浅いぞ」と言った。そのきまり文句についつりこまれて、助かるかも知れんな、と始めて生気をとりもどした。

戦場で一番たよりになるのは、戦友と我が隊である。

今日私の生還は、この二つにあった。

かくて前線の野戦病院へ收容され、岳州の野戦病院を経て、更に武昌の野戦病院に後送されてはじめて落着き、療養六ヶ月の後に治癒退院、原隊復帰の道をたどるのであるが、師団はソロモン戦域へ転戦することになり、私達の連隊も馴じみ深い岳州を後に、孝感を経て潮の香のする上海まで下り、旬日の後、船団を組んで上海を出帆した。内地を横にみながら、パラオ・トラックを経由してラバウルに上陸、六ヶ月訓練の後、愈々ソロモン群島へ進出した六師団将兵は、いまだかつてないような、悲惨な戦闘に突入することになるのである。

### 三、いまわのきわの一言

ソロモン群島ブーゲンビル島では、私共は実に言語に絶する辛酸をなめた。内地からの補給は絶えてなく、兵隊は山野をあさって草木は勿論、毒のない物はすべて食うて飢を凌いだ。ある日の行軍中、皆道端につき坐ってもう歩けない。近くにあった木の実を腹に入れて、やっとう行軍を続けた。またある日には、前を行く兵隊が、山裾の草の葉をちぎって口に入れ、「おおう!!この草は食えるぞ」と云う。後に続く私が、「おれにも食わせてみせろよ」とその葉を口に入れてかみしめたこともあった。体調をこわせば忽ち栄養失調となる。一度栄養失調となれば、回復する事はまづむずかしい。氣息奄奄えんえん、日を追うて衰弱し、遂に護国の鬼となる。こうした私達には、金も地位も名誉もおよそ無縁なものだった。たゞ飲みたい、食いたいの飢餓の苦しみがあるだけだった。

連隊主力と共に前線にあった私は、命令受領者として後方へ派遣された。師団司令部から命令の下達を受けて、前線の連隊へ送達するのが主な任務であったが、また一つには、前線と後方の連絡事務所とも云える性格も持っていた。師団隷下の各連隊も、すべてこうした組織になっていた。命令受領者同志皆親しかった。

私の所属する熊本の一三、都城の二三、鹿児島四五、

あるいは砲・工・騎・輜重等の名だる連隊が轡を並べていたが、軍の改編で、大分の四七が師団から去っていったのは寂しい事だった。

宮崎出身で富田と云う兵隊がいたが、彼は上海で編入された補充兵であった。私の班に属し共に苦勞した仲であった。とかく補充兵は、古兵の中にあつて常に氣をつかい、休む間もなく下働きをせねばならなかつた。それに野戦の経験にも乏しく、体の鍛練もできてない。勿論古兵も戦死するが、ブーゲンビル島のような戦線では、多くの補充兵が戦死したようである。

こうした雰囲気の中にあつて、私の性格が彼には余程近づきやすかつたのであろう。班長殿、班長殿と心からなつていた。

ブーゲンビル島に来てから、彼も頑張っていたが遂に栄養失調となつて、前線の任務に堪える事が出来なくなり、隊長の計らいで、「岩田軍曹のところへ休養せよ」と二、三の連絡兵と共に前線を出発したが、途中で遂に倒れた。いまわのきわに「岩田班長殿にもう一度、逢いたい」と云つたという。後日到着した兵隊からその事を聞いて、私は慄然とした。「富田よゆるせ。おれはそんな立派な班長じゃないんだぞ」と、心中ひそかに詫びた。

どうせ無い命ではあつたらうが、せめて二、三日でも、再会の喜びを分かちあつて死なせせたかつた。戦場の常とは申せ、心の傷む悲しい事だった。

その思いもはや幾歲月、遥かに遠くならうとしてゐる。ある人が云つた「歲月が過ぎれば、思い出もまた消えてゆくのではないか。」と、まさにその通りであらう。しかし私は首をふつた。

六師団三万八千のうち、生還した者僅かに六千、二年有半のうちに実に三万二千の將兵が戦死している。そのうち県人は、千五百にも及ぶと云う。ブーゲンビル島が墓島と云われる所以である。

年うつるとも大方の屍は拾われる事もなく、貴賤の別なく同じ枯骨となつて、墓島の陰雨けふる夜は、未だに悲しくも関の声をあげているのではないか、あちこちの叢の中では鬼哭<sup>しげい</sup>、嗚<sup>う</sup>泣<sup>な</sup>き<sup>き</sup>の<sup>こゝろ</sup>もまたきこえて来るのではないか。

全国ソロモン会では、今日まで遺骨収集、慰靈巡拝、主要激戦地近くの教会へ、慰靈平和の鐘やオルガン等寄贈して来たが、今回現地政府の許可を得て、ソロモン戦域戦没者慰靈碑数基を、主要戦跡に建立することになつている。